

# Contents

1	序章	2
2	綿羊	4
3	花儿	7
4	第四章	9
5	第五章	11
6	第六章	13

# Chapter1 序章

六歳さいの時とき僕は、たいけん「体験談」という原生林げんせいりんについて書かかれた本ほんで、素晴すばらしい挿絵さしえを見たことがある。それは大蛇だいじゃのボアが猛獣もうじゅうを飲のみ込こもうとしている絵えだった。本ほんにはこんな説明せつめいがあった。

ボアは獲物えものを噛かまずに丸まるごと飲のみ込こみます。すると動うごけなくなるので、獲物えものを消化しょうかする半年はんとしもの間あいだ、ずねむっと眠すって過すごします。

僕はジャングルでの冒険ぼうけんについていろいろと考かんがえ、自分じぶんでも色鉛筆いろえんぴつを使つかって、生まれて初はじめての絵えを描かき上あげた。その傑作けっさくを大人おとなたちに見みせ、怖こわいかどうか聞きいてみた。すると、こんな答こたえが返かえってきた。

どうして帽子ぼうしが怖こわいんだい？

帽子ぼうしの絵えなんかじゃなかった。ゾウを消化しょうかしているボアを描えがいたのだ。でも、大人おとなにはわからないらしいので、今度こんどはボアの内側うちがわの絵えを描かいてみた。大人おとなには何時なんじだって説明せつめいが必要ひつようなのだ。僕の二番目にばんめの絵えでは、ちゃんとボアの中なかにいるゾウが見みえていた。しかし大人おとなたちは中なかが見みえようが見みえまいが、ボアの絵えは片付かたづけて、地理ちりや歴史れきし、算数さんすうや文法ぶんぽうの勉べんきよう強きやうをしなさいと、僕ぼくを嗜たしなめた。

こうして、6歳さいにして僕は偉大いだいな画家がになるという夢ゆめを諦あきらめた。作品第一号さくひんだいごうと第二号だいごうが共に不評ふひようで、気持きもちが挫くじけてしまったのだ。

大人おとなというのは、自分たちとは全まったく何なにもわかっていないから、いつも子供こどもの方ほうから説明せつめいしてあげなきゃいけないくて、うんざりする。僕は別べつの仕事しごとを選えらぶ必要ひつように迫せまられて、飛行機ひこうきの操縦士そうじゅうしになった。そして、世界せかい中じゅうをあちこち飛とび回まわった。地理ちりは確たしかに役やくに立たった。僕は一目ぼくで中ひとめ国ちゅうごくとアリゾナみわを見分ことける事ことができる。夜間飛行やかんひこうで迷まよった時ときなど、そういう知識ちしきがあると本ほん当とうに助たすかる。

これまでの人生じんせいで、僕はたぼくくさんの重じゅうよう要人物じんぶつと知しり合あった。随分ずいぶん多おおくの大人おとなたちと一いっしょ緒くに暮みらしたし、マジカにも見みてきた。それでも僕ぼくの考かんがえはあまり変かわらなかつた。僕は物分ものわかりのよさそうな人ひとに出会であった時ときには必かならず、肌はだに離はなさず持もち歩あるいていた作品第一号さくひんだいごうを見みせ、実験じっけんしていた。その人ひとが本ほん当とうに物事ものごとの分わかる人ひとかどうか、

<sup>し</sup>知りたかったから。でも、<sup>こた</sup>答えはいつも<sup>おな</sup>同じだった。

<sup>ぼうし</sup>帽子だね。

その後僕はボアの<sup>はなし</sup>話も、原生林の<sup>げんせいりん</sup>話も、星の<sup>ほし</sup>話もしなかった。<sup>はなし</sup>話を合わせて、  
ブリッジやゴルフや、政治やネクタイの<sup>せいじ</sup>話をした。するとその大人は<sup>おとな</sup>話が<sup>はなし</sup>わかる<sup>わ</sup>相手<sup>あいて</sup>  
と知り<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>えたと言って<sup>い</sup>喜<sup>よろこ</sup>ぶのだ。

## Chapter2 綿羊

こうして僕は、六年前、サハラ砂漠で飛行機が故障するまで、心を許して話せる相手に出会う事もなく、一人で生きてきた。飛行機はエンジンのどこかが壊れていた。整備士も、乗客も乗せていなかったの、僕は難しい修理の仕事を一人でやり遂げるしかなかった。

死活問題だった。飲み水は一週間分あるかないかだった。

最初の夜、僕は、人の住む場所から千マイルも離れた砂の上で眠った。大海原を筏で漂流する遭難者より、ずっと孤独だった。だから、夜明けに小さな可愛らしい声で起こされた時、僕がどんなに驚いたか想像してみしてほしい。その声は、こう言った。

お願い、羊の絵を描いて。

えっ？

羊を描いて。

雷に打たれたみたいに飛び起きると、目を擦って辺りを見回した。そこには、とても不思議な子供が一人いて、僕を真剣に見つめていた。僕は突然現れたその子供を、目を丸くして見つめた。何度も言うけれど、人の住む所から千マイルも離れていたのだ。しかしその子は道に迷っているようには見えなかった。疲れや餓えや渇きで死にそうになっているようにも、怖がっているようにも見えなかった。人の住む所から千マイルも離れた砂漠の真ん中にいながら、途方に暮れた迷子といった様子は少しもなかったのだ。

ようやく口が聞けるようになると、僕はその子に尋ねた。

君はこんな所で何をしているの？

しかしその子はとても大切な事のように、静かに繰り返すだけ。

お願い、羊の絵を描いて。

バカげた話だが、人の住む所から千マイルも離れて、死の危険にさらされているというのに、僕はその子に言われるままに、ポケットから一枚の紙切れと万年筆を取

だ  
り出してた。

だけどそこで、僕が一生懸命勉強してきたのは、地理と歴史と算数と文法だけだった事を思い出して、少し不機嫌になりながら、絵は描けないんだと、その子に言った。

そんなの構わないよ。羊を描いて。

僕は羊の絵なんか描いたことはなかったので、自分に描けるたった二つの絵の内  
の一つを描いてあげた。ボアの外側の絵だ。その時男の子がこういうのを聞いて、僕はびっくりした。

違う、違う、ボアに飲み込まれたゾウなんていないよ。ボアはとっても危険だし、ゾウは結構場所塞ぎだから。僕の所はとっても小さいんだ。欲しいのは羊、羊を描いて。

そこで僕は羊を描いた。

ううん、駄目だよ。この羊はひどい病気だ。違うのを描いて。

僕は描き直した。男の子は僕を気遣って優しく微笑んだ。

よく見て。これは羊じゃないでしょう。雄羊だよ。角があるもの。

そこで僕はまた描き直した。けれどそれも前の二つと同じように拒絶された。

この羊は年を取りすぎてるよ。僕、長生きする羊が欲しいの。

我慢も限界に近付いていた。修理を始めなければと焦っていた。僕はざっと描き殴った絵を男の子に投げ渡した。

これは羊の箱だ。君が欲しがっている羊はこの中にいるよ。

すると驚いたことに、この小さな審査員の顔がぱっと輝いたのだ。

ぴったりだよ。僕が欲しかったのは、この羊さ。ね、この羊草をいっぱい食べるかな。

どうして？

僕の所はとっても小さいから。

大丈夫だよ。君にあげたのは、とっても小さな羊だからね。

そんなに小さくないよ。あれ、羊は寝ちゃったみたい。

こうして<sup>ぼく</sup>僕は<sup>ちい</sup>この<sup>おうじ</sup>小さな<sup>し</sup>王子<sup>あ</sup>さまと知り合いになった。

## Chapter3 花兒

王子さまがどこから来たのか分かるまで、かなり時間がかかった。王子さまは僕にはたくさん質問をしてくるのに、こちらからの質問にはほとんど耳を貸さなかったのだ。

少しずつ全てが明らかになっていったのは、王子さまが偶々口にした言葉からだった。それは初めて僕の飛行機を見た時の事だ。

なに？ これ。

飛行機。空を飛ぶんだ。僕の飛行機さ。

空を飛べると自慢げに話していたら、王子さまは大声で言った。

えっ？ じゃ、君は空からおっこちてきたんだ。

まあ、そうだな。

ああ、それはおかしいね。

王子さまは可愛い声で笑い出したが、僕はかなりいらいらした。自分を襲った災難を真面目に受け取って欲しかったのだ。しかし王子さまは続けてこう言った。

それじゃあ、君も空から来たんだね。どの星から来たの？

その瞬間、王子さまがなぜここにいるのかという疑問にさっと光が差し込んだように感じて、僕はすぐに尋ねた。

君はよその星から来たのかい？

しかし王子さまは答えず。飛行機を見て、そっと首を振っただけだった。

これに乗って来たのなら、そんなに遠くからじゃないよね。

そう言うと、物思いに沈んでいった。王子さまはポケットから羊の絵を取り出して、大切そうに眺めていた。

君はどこから来たの？ その羊をどこへ連れて行くつもりなの？

この箱がいいのはね、夜になると、羊の小屋になるってところだよ。

そうだね、いい子にしていたら、昼間は羊を繋いでおく綱もあげるよ。それに、綱を結んでおく杭もね。

羊を繋いでおくの？ おかしいよ、そんなの。

でも、繋<sup>つな</sup>いでおかなかったら、勝手<sup>かって</sup>にあっちこっち歩<sup>ある</sup>き回<sup>まわ</sup>って、どこかいなくなっ  
ちゃうだろ。

すると、僕<sup>ぼく</sup>の友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>はまた笑<sup>わら</sup>い出<sup>だ</sup>した。

羊<sup>ひつじ</sup>がどこへ行<sup>い</sup>くっていうのさ。

どこにでも。ずっとまっすぐ歩<sup>ある</sup>いていて。。。。

大<sup>だい</sup>丈<sup>じょう</sup>夫<sup>ぶ</sup>だよ。僕<sup>ぼく</sup>の所<sup>ところ</sup>は本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に小<sup>ちい</sup>さいからね。まっすぐに行<sup>い</sup>っても、そんなに遠<sup>とお</sup>  
くには行<sup>い</sup>けないよ。



## Chapter4 第四章

こうして僕は二つ目のとても大切な事を知った。王子さまのいた星は、家一軒よりやや大きいくらいの大きさなのだ。それほど驚きはしなかった。地球や木星、火星、金星の様に、名前のある巨大な星以外にも、望遠鏡でも見つからないほど小さな星が、何百とあることを知っていたからだ。天文学者がそんな星を発見すると、名前の代わりに番号をつける。

例えば、小惑星325といった様に。王子さまがやってきた星は、小惑星B612だと思う。1909年に、トルコの天文学者が一度だけ望遠鏡で観測した星だ。天文学者は国際天文学会で、自分の発見について堂々と発表した。しかしその時は服装のせいで、誰にも信じてもらえなかった。大人なんてそんなもんだ。しかし、小惑星B612に名誉挽回の幸運が訪れた。トルコの独裁者が国民にヨーロッパ風の服を着るように命令し、従わなければ死刑という事になったのだ。そこで天文学者は、1920年、今度はもっと専念された服装で同じ発表を繰り返した。この時は皆が彼の言う事を信じた。

この星の事をこんなに詳しく話して、番号まで教えるのは、大人たちのせいだ。大人は数字が好きだ。数字以外には興味がない。新しい友達の事を話しても、どんな声か、どんな遊びが好きか、ちょうちょう集めているか、といった大切な事は何も聞いてこない。何歳か、何人兄弟か、お父さんの年収はいくらか、といった数字の事ばかり聞いてきて、それですっかり知ったつもりになる。

王子さまは本当にいたよ。可愛かったし、笑っていたし、羊を欲しがっていた。だって、羊を欲しがらって事は、間違えなくその人が本当にいるって事の証拠だからね。

こんなふうに話しても、大人は肩を竦め、子供扱いするだけだ。しかし、王子さまが来た星は小惑星B612だよ、たとえば、大人は納得して、それ以上余計な事は聞いてこない。

大人なんてそんなもんだ。でも、悪く思っているはいけないよ。子供は大人に対して、広い心で接してあげなきゃね。でも、生きるという事がどういう事なのか、よくわ



## Chapter5 第五章

ひ お ぼう おうじ ほし こと たびだ たび  
日を追うごとに僕は王子さまの星の事や、そこからの旅立ち、これまでの旅について知るようになっていった。おうじ たまたまうち ことば すこ ようす  
王子さまが偶々口にした言葉で、少しずつ様子がわかってきた。こうして三日目に、バオバブをめぐる大騒動を知った。これも ひつじ  
羊のおかげだった。おうじ きゅう しんぱい  
王子さまが急に心配になったらしくて、こう聞いてきたのだ。

ひつじ ちい き た ほんとう  
羊が小さな木も食べるって、本当なんでしょう？

うん、ほんとうだよ。

ああ、よかった。

ひつじ ちい き た こと だいじ こと ぼう  
羊が小さな木を食べる事がなぜそんなに大事な事なのか、僕にはわからなかった。しかし、おうじ さら き  
王子さまは更にこう聞いてきた。

だったら、バオバブも食べるよね。

ぼう おうじ ちい き きょうかい たてもの おな おお  
僕は王子さまにバオバブは小さな木じゃなくて、教会の建物と同じくらい大きな木だから、ゾウの群れを丸ごと連れてきても、たった一本のバオバブも食べきれないだろうと教えてあげた。ゾウの群れを思い描いて、おうじ わら  
王子さまは笑った。

うえ うえ つ かさ  
上に上に積み重ねなきゃいけないね。

しかし、つづ するど してき  
続けてなかなか鋭い指摘をした。

バオバブだって、おお きなる まえ ちい  
大きくなる前は、小さいんだよね。

そりゃそうだよ。それにしても、どうして ひつじ ちい  
羊に小さなバオバブを食べてもらいたいんだい？

なに い  
何を言ってるの？ そんなのあたり前でしょう。

ぼう ひとり なんもん と あ こと さんざんあたま ひね  
僕は一人でこの難問を解き明かす事になり、散々頭を捻った。つまり、こういう事だ。おうじ ほし ほか ほし おな くさ わる くさ  
王子さまの星には、他の星と同じように、よい草と悪い草があった。よい草はよい種から育ち、悪い草は悪い種から育つ。しかし、種は目に見えない。土の中で ひつじ  
ひっそりと眠っている。その一つが気まぐれに目を覚ますと、伸びをして、おずおずとあどけない小さな茎を太陽に向かって伸ばし始める。それが あかかぶ  
赤蕪やバラだったら、そのままにしておいて構わない。でも、わる くさ わ ぬ と  
悪い草だと分かったら、すぐに抜き取らなくて

はいけない。王子さまの星には、そんな恐ろしい種があった。バオバブの種だ。星の土はどこもかしこもバオバブの種だらけだった。少しでも抜くのが遅れると、バオバブはもう手がつけられなくなる。星全体を覆いつくし、根っ子がつき抜け、穴を開けてしまう。小さな星だと殖過ぎたバオバブで破裂してしまう。

決まりにできるかどうかだね。毎朝、自分の身支度が済んだら、星の手入れに取り掛かる。

芽を出したばかりのバラとバオバブはよく似ているんだけど、それを見分けて、バオバブだと分かったら、すぐに抜いてしまう。手間はかかるけど、とっても簡単な事だよ。偶には仕事を後回しにしても大丈夫な時ってあるけど、バオバブでそんな事をしたら、取り返しがつかなくなるんだ。例えばね、ある星に怠け者が住んでいたんだけど、その人は三本さんぽんバオバブをほったらかしにしていたばかりに……僕は王子さまの話す通りにその星の絵を描いた。星より巨大な三本のバオバブと途方に暮れる怠け者、お説教臭い事を言うのはあまり好きじゃないけれど、バオバブの脅威は地球ではほとんど知られていないし、小惑星で道に迷った人が危険な目に遭う可能性は、あまりにも大きい。だから僕は一度だけ普段の慎みを忘れて、こう言っておこう。

おい、子供たち、バオバブに気をつけろ。

僕は友人たちに警告を与えるために、一生懸命この絵を仕上げた。苦労して描いた価値はあった。他はこれほどうまくいかなかった。バオバブを描いた時は、切羽詰って気持ちが高ぶっていたのだ。

## Chapter6 第六章

ああ、<sup>ちい</sup>小さな<sup>おうじ</sup>王子さま。こうして僕は<sup>ぼく</sup>少しづつ、<sup>すこ</sup>ささやかで<sup>ゆううつ</sup>憂鬱な<sup>きみ</sup>君の<sup>じんせい</sup>人生を<sup>りかい</sup>理解していった。<sup>なが</sup>長い<sup>あいだ</sup>間、<sup>きみ</sup>君には<sup>うつく</sup>美しい<sup>ゆうひ</sup>夕日しか<sup>こころ</sup>心を<sup>なぐさ</sup>慰める<sup>もの</sup>物がなかった<sup>こと</sup>事も。僕は<sup>ぼく</sup>がこの<sup>ひみつ</sup>秘密を知ったのは、<sup>し</sup>四日目の<sup>あさ</sup>朝。君がこう言った<sup>きみ</sup>時だ。

僕は<sup>ぼく</sup>、夕日<sup>ゆうひ</sup>が大好きなんだ。夕日<sup>ゆうひ</sup>を見<sup>み</sup>に行こうよ。

でも、<sup>ま</sup>待たなきゃね。

待つって、<sup>なに</sup>何を？

日<sup>ひ</sup>が沈<sup>しず</sup>むのをさ。

君<sup>きみ</sup>はとてもびっくりしたようだった。そして、すぐに<sup>わら</sup>笑<sup>だ</sup>い出した。

僕は<sup>ぼく</sup>、まだ<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ほし</sup>星にいるつもりにたっていたよ。

そうだね。

誰<sup>だれ</sup>もが知<sup>し</sup>っているように、アメリカが<sup>しょうご</sup>正午の<sup>とき</sup>時にはフランスは<sup>ゆうぐ</sup>夕暮れだ。だから、<sup>いちぶん</sup>一分でフランスに飛<sup>と</sup>んで行<sup>おこな</sup>けたら、夕日<sup>ゆうひ</sup>を見る<sup>み</sup>事ができるけど、<sup>ざんねん</sup>残念ながら、フランスは<sup>とお</sup>遠すぎる。だけど君の<sup>きみ</sup>小さな<sup>ちい</sup>星<sup>ほし</sup>では、ほんの<sup>すこ</sup>少し<sup>いそう</sup>位相<sup>うご</sup>を動かすだけでいい、そうすれば見<sup>み</sup>たい<sup>とき</sup>時に<sup>なんじ</sup>何時でも、<sup>たそがれ</sup>黄昏<sup>なが</sup>を眺めていられる。

僕は<sup>ぼく</sup>ね、一日に44回も夕日<sup>ゆうひ</sup>を見<sup>み</sup>た事<sup>こと</sup>があるよ。

そう言<sup>い</sup>って、<sup>しばら</sup>暫くしてからこう付<sup>つけくわ</sup>加えた。

ね、<sup>かな</sup>悲しくてたまらない<sup>とき</sup>時<sup>ゆうひ</sup>って、夕日<sup>ゆうひ</sup>が恋<sup>こい</sup>しくなるよね。

44回も夕日<sup>ゆうひ</sup>を見<sup>み</sup>た日<sup>ひ</sup>は、<sup>かな</sup>悲しくてたまらなかったのかい？

しかし、<sup>おうじ</sup>王子さまは<sup>こた</sup>答<sup>こた</sup>えなかった。